

『#王とサーカス』（米澤穂信著）を読んでみた。著者は、『折れた竜骨』で第64回日本推理作家協会賞、本作で第27回山本周五郎賞受賞、『黒牢城』で第166回直木三十五賞受賞、等を受賞している。本作は、2015年刊行され、前年の『満願』に続いて2年連続でミステリーランキング3冠に輝いた。

本作は、太刀洗万智を主人公とするシリーズの一つで、『#さよなら妖精』から10年後に設定されている。

2001年6月にネパールの王宮で実際に起きた事件を背景にしている。ネパールと言えば、40年前にお世話になった教授からネパールでの診療を打診されたことを思い出す。太刀洗から取材を受けた軍人が殺害された事件と、その殺害事件の記事を書く太刀洗の懊悩を描いた作品である。タイトルの『王とサーカス』は、悲劇の記事を書くこと（サーカスの出し物）によって読者に娯楽を提供する（王の死）記者を批判する軍人の言葉に由来する。

新聞社を辞めてフリーの記者になったばかりの主人公は、知人の雑誌編集者から依頼されたアジア旅行特集の事前取材のためにネパールの首都カトマンズへやって来た。宿泊するトーキョーロッジには、日本人の元僧侶とアメリカ人大学生、インド人の商人が泊まっていた。太刀洗は現地で知り合った利口な少年を気に入り、彼にガイドを頼み、取材を始めようとした矢先、王宮で国王をはじめとする王族8人が皇太子に殺害されるという大事件が勃発する。

街に不穏な空気が漂う中、太刀洗は取材を開始する。ロッジの女主人の夫の知人の軍人が王宮に配属されて、事件当日も王宮の警備に当たっていたことを知った太刀洗は、女主人を通じて取材を申し入れる。しかし、翌日にその軍人には会えたものの、国王の死という国の悲劇を他国民の娯楽のために伝えるつもりはないと拒否される（タイトルの由来）。

翌日、真実を知り伝えるという記者としての信念が揺らぎながらも取材を続ける太刀洗は、警官隊の民衆への発砲と粛清から逃れて行き着いた空き地に、背中に「INFORMER（密告者）」と刻まれた軍人の死体を発見する。警察の取り調べを受けたものの、すぐに無実が確認された太刀洗は、捜査官に疑問を告げる。軍人が密告者として殺されたのなら、なぜ自分は無事なのかと。

本作は報道と何かを読者に問いかける。第14章が「ハゲワシと少女」。1994年、「#ハゲワシと少女」(The Vulture and the Little Girl)という写真でKevin Carter がピューリッツァー賞を受賞。餓死寸前の少女をハゲワシが狙

っている写真で、スーザンの飢餓を訴えたものだったが、1993年3月26日付の新聞に掲載されると絶賛と共に多くの批判が寄せられた。「報道か人命か」というメディアの姿勢を問う論争に発展した。授賞式から約2か月後、Carterは自殺した。死の数年前から衝撃的な写真を撮ることと、そうした写真ばかりが喜ばれることに疑問を抱いていたという。著者は、犯人推理よりも報道姿勢に力点を置いているように思われる。

ネパールは南アジアに位置する内陸国で、インドと中国（チベット自治区）に挟まれている。首都はカトマンズで、ネパールの文化や経済の中心地。世界最高峰であるエベレスト山（標高8,848メートル）があるヒマラヤ山脈に位置している。多様な地形を持ち、北部の山岳地帯から南部の平野部まで変化に富んだ環境が広がっている。

多民族国家であり、さまざまな文化や言語が共存し、ヒンドゥー教と仏教が主な宗教である。「カトマンズ溪谷」は歴史的な建築や世界遺産が多く残る地域である。農業が主要産業であり、お米や茶葉、スパイスなどが生産されている。近年では観光業も成長しており、トレッキングや文化遺産巡りが人気。ネパール料理には「ダルバート」（豆スープとご飯）やモモ（ネパール風餃子）がある。2008年に王制が廃止され、共和制に移行し、現在は民主政治が行われており、様々な政党が存在する。

ネパール王族殺害事件は、2001年6月1日にネパール王国の王宮で発生した事件。王太子が父王ら多数の王族を殺害したとされる事件である。ただし、事件に関する不自然さ、矛盾などから王太子が真犯人かどうかは疑問視されている。また、事件後に即位経緯からクーデターとする説もある。だが、いずれの説も決定的な証拠がなく、その真相は現在に至るまで不明なままである。